

会 議 名	令和５年度第４回小金井市立はけの森美術館運営協議会		
事 務 局	市民部 コミュニティ文化課（はけの森美術館）		
開 催 日 時	令和６年１月１２日（金）１８時３０分～２０時００分		
開 催 場 所	市立はけの森美術館 多目的講義室		
出 席 委 員	鉄矢悦朗会長 山村仁志委員 原田隆司委員 坂井文枝委員 加藤治紀委員 中川法子委員		
欠 席 委 員			
事 務 局 員	コミュニティ文化課文化推進係 津端 佐原 同 はけの森美術館学芸員 中村、河上、西尾 同 はけの森美術館学芸顧問 河合		
傍 聴 の 可 否	可		
傍聴不可・一部不可 の場合は、その理由		傍聴者数	０人
会 議 次 第	（１）事業報告等 （２）意見交換 （３）その他、次回日程調整等		
会 議 結 果	別紙のとおり		
会 議 要 旨	別紙のとおり		
提 出 資 料			

【鉄矢会長】 皆さん、こんばんは。本日は御多忙の中お集まりいただき、誠にありがとうございます。ただいまより、令和5年度第4回小金井市立はけの森美術館運営協議会を開催いたします。

次第1、「うるおうアジア」の鑑賞につきましては、皆さん御覧になったということで、議事に入らせていただきます。

それでは、本日の配付資料の確認を事務局をお願いします。

【事務局】 事務局です。ホチキス留めの資料が資料1、展覧会の教育普及事業の報告、横書きの日程表が1枚、資料ナンバーがないもので、提言の素案が1部置いてございます。足りないものはないでしょうか。ありがとうございます。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。それでは、次第の2、事業実施報告について、担当の学芸員さんから説明をお願いいたします。

【河上学芸員】 学芸員の河上です。まず1、開催中の展覧会・教育普及事業等の御報告です。企画展①「笹川治子＜中村研一作品とともに＞届けられた色」と題しました笹川治子氏の個展が開催されまして、前回の運営協議会のときは会期中でありましたが、11月5日をもちまして終了いたしましたので、そちらの入館者数等の御報告をさせていただきますと思います。

こちらの資料1の1ページ目にごございます入館者数のところを御覧いただきますと、総合計1,451人ということで、1日平均、こちらが56日間開催した展覧会ですけれども、1日平均が25.9人。この総合計に関しましては、市内の小学校4年生の鑑賞教室で来館したお子さんと、あとは先生方も含むものですので、それを除いた場合は1日平均が16.6人です。人数といたしましては、今年度の志村信裕展のときよりも少し少ないような人数にはなったのですが、合計といたしまして1,451人で平均25.9人入ったというところで非常によかったのでは、数としては悪くなかったのではないかと考えております。1点、鑑賞教室で来館した生徒さん、学校さん、来館予定が6校、うち1校は台風でキャンセルになりましたので、実際には5校の来館があったところです。

続きまして、関連企画に関しまして、1番の佐藤道信氏の特別講演会に関しましては、前回の運営協議会で御報告をさせていただいたかと思っておりますので、2番以降を少し御報告させていただきたいと思っております。2番のワークショップ、「思い出のかけらを集めて」というのは大人向けの創作ワークショップで、こちらは笹川治子さん、本展作家の笹川さんと、あとは笹川さんがメンバーほか2名と一緒に活動しているアーティストグループによ

る創作ワークショップとなります。こちら、定員10名のところ、参加者数が6名となりまして、こちらも実際大人向けのワークショップというのはあまり当館で設定をしたことがなかったもので、どれぐらい人が入るかなというところで少し懸念はしていたのですけれども、6名集まって、さらにちょうどいい規模といいますか、各自、講師の作家さんと丁寧と一緒に向き合って、会話しながら、すごくうまくワークショップが行われたかと思っています。さらに、このワークショップの成果物に関しては、展示の一部として、2階のラウンジに、その後展示をいたしました。そういうこともありまして、参加者の方が非常に満足度も高く、満足をして参加して帰られたというようなイベントになりました。

続きまして、ページ2枚目、裏面です。3番の「笹川治子のお絵かきワークショップ」というところ、こちらは子供向けのワークショップになりまして、定員15組というところで募集をしましたところ、参加者計14名、10組の方が参加されました。(2)も参加費を300円としていたのですけれども、(3)も参加費300円頂戴して、こちらは実際小さなキャンバスに絵の具を使って絵を描くという、そういった手を動かすワークショップを開催しました。今回の笹川治子展は、絵画とは何かというような大きなテーマのところで、コンセプトを持って企画をしていたところもありまして、実際絵画を描いてみようという非常にシンプルなワークショップとして設定しまして、こちらも参加者の皆様が描いた絵を自宅に持って帰っていただけるというところで、非常に楽しかったとか満足の声をいただいて終了いたしました。

(4)、こちらはギャラリートークが全2回あって、1回目につきましては前回の運営協議会の前に行われたので、その様子などについて御報告はしているのですけれども、引き続き2回目に関しましては10人前後のお客様に参加いただきまして、笹川治子さんの作家御本人の解説、生の声を通して作品を見ていただくという特別な鑑賞会になったのではないかなと思っております。

①の笹川治子展については以上です。

【西尾学芸員】 続きまして、現在開催中の「うるおうアジアー近代アジアの芸術、その多様性ー」展について、学芸員の西尾から報告させていただきます。この展覧会は、去年の12月2日の土曜日から始まりまして、本日までで15日間の開催となっております。と申しますのも、今回の展覧会につきましては、先ほどの笹川治子展とは違いまして、去年度の段階から準備を進めていた、つまり、コロナが5類に移行する前から準備を進めていたという経緯がありまして、月曜と火曜を休館にしているため、現在でもまだ開館日数

がそこまで多くないということになっております。

現状の入館者数でいきますと、有料の入館者数の合計が446人、小学生ですとか、あと鑑賞教室として2校の学校が参加してくださったのですけれども、それも含めると783名の方に御覧になっていただいているという状況です。1日平均は31.3人になりまして、もう少し伸びるかなと思っていたのが正直なところなのですけれども、あとは後半戦、もう少し伸びてほしいなと思っているところでございます。

この展覧会が始まりまして、既に先月の段階で3つのイベントが終了しておりますので、次にイベントについて報告させていただきます。

資料の3ページになりますが、まずは12月3日に当館学芸員、私のほうで、1階展示室をぐるっと回る形でのギャラリートークを行いました。これは通常当館で行っているようなギャラリートークになります。

続きまして、その翌週、12月9日に、亜細亜大学による多文化工作ワークショップを開催しました。こちらは、前回か前々回の運営協議会の際に、「1日ワークショップ」という名前にしていたのですけれども、1日いられる人が全員ではないという指摘を受けましたので、このようにタイトルを変更してお送りしました。こちらはどのような内容であったかといいますと、亜細亜大学の教員の方がお二人と、あとは亜細亜大学の国際コミュニケーション学科の学生の方が数名来てくださって、午前中は、実際にインドの神々ですとか日本の五重の塔の建物ですとか、そういった絵を、デザインカッターを使って切って、それを投影して手で動かして遊ぶという体験になりました。かなり細かい作業を必要とするものなので、大人の方が参加してもとても満足して楽しんでいられたように見られました。

午後については、学生の手作りの工作キットを使って、小さなリキシャを自分で手で作って、さらにそれを好きなように装飾するというようなイベントがありました。こちらはかなり集中力が必要とされますし、また、自分のオリジナルの装飾ができるということで、こちらで期待した以上に参加者の皆様が満足して帰られていたかなと思いました。また、そのほかにも、亜細亜大学の学生の皆様が、自分でインドに旅行に行って採話した物語を影絵に起こした新作をこちらで上映してくださって、それをみんなで見るという機会もありまして、とても盛り上がるイベントとなりました。今後も亜細亜大学の皆さんとも何らかの形で協働していけることがあるとうれしいなと期待しております。

続きまして3番が、「キッズ&ユース・アートワークショップ：アジアンアート・デコ

パージュ」というイベントでして、こちらではまず1階展示室で様々な国の作品を鑑賞しながら、その作品がどこの国の作品であるかということを考えながら、みんなで作品を鑑賞するという体験を持ちまして、その後、この多目的室に移動して、作品の画像を鑑賞しながら、それを基に自分でコラージュをするという、そういったワークショップを行いました。コラージュと申し上げておりますが、もちろんこちらを使用した素材というのは、福岡アジア美術館さんから許可を得た素材のみを使用してイベントを行っております。こちらについても、なかなか普段できないデコパージュの体験ができるということで、参加した皆様、とても満足していらっしゃいました。中には、作品鑑賞のみ参加される小学生の方とかもいたのですけれども、それだけでも十分楽しんでいかれたイベントだったかなと感じております。

これから実施するものにつきましては、まさにもう明日なのですけれども、未就学児も含めたお子様を対象とした「カラフルにかざって宝箱を作ろう!」というものと、その翌日、明後日は、東京外国語大学の准教授の先生に「うるおうアジア」特別レクチャーというものをこちらの会場で行っていただく予定です。また1月の下旬に、こちら、日付を書き忘れてしまったのですけれども、もう一回ギャラリートークを開催する予定でございます。

【河上学芸員】 4ページ目の2の教育普及の活動に関しましては、今、展覧会の御報告にちょっと挟ませていただいたところもございますが、復唱いたしますと、笹川治子展「届けられた色」展には、市内の小学校5校の4年生が来館し、第三小学校は台風により中止となっております。「うるおうアジアー近代アジアの芸術、その多様性ー」に関しましては、来校が2校ございまして、それも12月15日をもって今年度の鑑賞教室については全て終了しているところです。また、各校の先生方からはいろいろ御感想等をいただいております、大変楽しかった、初めて美術館に来るお子さんが多いということで、また来たいというお声なんかもたくさんいただいておりますし、あとはフィードバックとして、学校さんによっては感想文が毎回来たりして、とても楽しく学芸員の中で読ませていただいているので、来年度もまた引き続き鑑賞教室については力を入れて頑張っていきたいと思っている所存です。

以上です。

【中村学芸員】 そのまま、「今後の展覧会・教育普及事業等」というところの御報告を続けさせていただきます。こちら、学芸員の中村から報告させていただきますけれども、

こちら、所蔵作品展としましては、年度をまたぐ形のものについて、今決まっている状態で概要を報告させていただく形になります。こちらの展示は年度をまたぐという形になっているので、一部の内容が次年度のものになるということと、それから、まだ現段階で調整中のところが多くて、そもそも展示の開催に関わる原企の部分がまだ起案されておりませんので、今、こちらに報告させていただくことに関しましては、暫定的に現段階で決まっていることである、今後報告したことが変更される可能性があるということでお聞きいただければと思います。

次回に関しましては、会期をまたぐ形、2024年3月24日から5月12日ということで所蔵作品展を予定しております。こちら、仮題なのですが、所蔵作品展のタイトルとしましては、「中村研一の往還」、副題で「一都市、郊外、道の向こう」というタイトルを現状では候補として考えております。開館時間、休館日等に関しましては、これは平時のものが記載されておりますけれども、午前10時から午後5時まで、入館は午後4時半までということで、休館日に関しては、こちらは平時どおりの月曜日ということで、今暫定的にここに記載しております。

次年度の話になりますが、この会期の中にゴールデンウィークを含むので、4月29日と5月6日が祝日の月曜に当たっております。ここの部分を祝日として、月曜日だけでも開館して、翌平日に振替休館とするのか、それとも、月曜日は休館とするルールをそのまま適用するかということはまだこちらでは決定しておりませんで、今、暫定的に休館日は月曜日という形のみでの記載とさせていただきます。

こちらの所蔵作品展のタイトルに関しましては、概要に示したとおり、中村研一の人生というものを往還、道を行き来するということに重ねて見ていこうということで考えたタイトルになっておりまして、なお、本展においては修復が完了した寄贈作品「福井一二氏の肖像」を展示予定ということで、これが一種のお披露目展示になるということで1つトピックとして上げられればと思っている作品でございます。寄贈されてから傷みが激しくて、展示室に一回も出せていないどころか、収蔵庫の床に、立てると絵の具が剥がれて落っこってきちゃうので、平置きで1年間ぐらいつと保管してあったんですね。これが今年の修復予算の中で修復ができて、修復が完了したので、これをお披露目でできればと思っています。

現段階で決まっている限りというか、関連企画に関しては、これはこういうことをやるということで、細かいところはまだこれから詰めていくことになるのですが、まず

関連企画としましては、ギャラリーコンサート、こちらが会期開始の3月24日の前日、3月23日に予定をしております。また、今ここに記載している内容は、日程以外は基本的に前年度のギャラリーコンサートの内容を踏襲した形になっているのですが、この資料を今私のほうで作成した時点では演奏者の情報とかがなかったので、演奏者の情報などが丸ごと落ちている状態なんですけれども、今日の午後に、ピアノとハープの演奏ということで演奏者の選出が進んでいるということで聞き及びましたので、今後それを前提として調整をしていく。展示内容と合わせて、演奏者の方にどう関連づけていけるかというところで、場合によっては打合せをするということになろうかと思います。

イベントとワークショップ、ギャラリートークに関しては、まず読み聞かせとワークショップということで、「こごうちぶんこ ことりのへや」という地域文庫の方たちに、読み聞かせと創作を組み合わせたワークショップお願いできないかということで日程を調整中です。特にこちらの対象、未就学児から小学生までというところを念頭にしていますので、未就学児と小学生までという参加者が来やすい日程ということで、そこの中から、土日と平日とどちらがいいかということで相談をしているところです。こごうちぶんこさんのほうで創作の内容なんかも今いろいろプランとして考えてくださっていて、具体的に創作するものがどういうものかということなども、これは今後決まってきましたら随時お知らせできる形になろうかと思います。

担当学芸員によるギャラリートーク、こちらも日程は仮の状態になっているんですけれども、新年度に入ってからイベントが何もなくなってしまいますので、4月から5月の会期終わりまでのところで何かイベントをやれないかということで、ギャラリートークは4月以降の日程で今考えているところです。暫定的に4月6日と5月11日のそれぞれ土曜日を念頭にしております。

3番目のところ、中村研一の誕生日を記念した無料観覧日に関しましては、これは所蔵作品展、年度をまたぐものの中で恒例で行っているものでして、5月14日に近い観覧日を設定して無料の日にするよということで、今回、会期が5月12日までということで考えておりますので、会期最終日の5月12日を想定して調整できないかと思っております。

今後開催予定の展覧会に関しましては以上となります。

すみません、1つ言い逃してしまったのですが、展示のチラシのプランを今現在詰めているところで、幾つか上がってきておりまして、もしよろしければ、今日の帰り際にこちらでプランを見ていただいて、気に入ったものに付箋をつけていただけるとありが

たいです。今、調査をしております。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。資料2の表は特に説明は、今の内容がここに散りばめられたという。

【中村学芸員】 そうですね。資料2はスケジュールということで、報告内容のほうで、既に開催した展覧会としての笹川治子展のところから、11月のところから始まっておりまして、所蔵作品展である「中村研一の往還」、仮題ですけども、こちらの会期が終了する5月までということでスケジュールが記載されております。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。何か質問や御意見等ありましたら、よろしくお願いします。

【坂井委員】 質問よろしいですか。河上さんが御説明くださった大人のワークショップはめったにないというお話があった笹川治子さんのワークショップですけども、以前の会議でももししたらお聞きしているかもしれないですが、内容はどんなもの。音声を使ったあれでしたっけ。

【河上学芸員】 内容に関しては、「思い出」というのがキーワードとして展覧会に展示された作品にもありましたので、参加者の皆様の思い出を立体作品にしたらどうなるかという、試みでして、いろんな材料を使って、好きに思い出を皆さんで表現してみてくださいというものでした。ちょっとハードルの高いお題だったのですけれども、参加者の皆さん、すぐに材料をば一つと見て、昔会ったおばあさまとの思い出とか、参加者の皆さんの年齢は様々だったんですけども、若い方なんかは小さいときの猫の思い出とかを、猫の立体の作品を粘土で作ったり、これくらいのサイズの、A4、この台に載るくらいの作品を自由に作ってくださいというところで、創作をお願いしました。

【坂井委員】 材料はどうしたんですか。

【河上学芸員】 材料は笹川さんが御用意したものや、こちらの材料ももちろんつかって。例えば、木っ端とか粘土とかリボンとか、本当に様々なものを使って、思い出って一概に言えないものを形にするとどうなるかというのを、そのとき一生懸命、参加者の皆さんが考える、そういう時間ってなかなか持てないところもあって、非常に面白かったと言ってくださっていて、作った後は、思い出にまつわるお話をそれぞれに発表していただいて、その後は笹川さんが、こっちのラウンジにあった作品展示のほうに散りばめて置いていくというようなワークショップでした。

【坂井委員】 分かりました。これからの大人のワークショップがあるとしても、館と

して得た知見というか、糧みたいなものはどんなものが得られたんですか。

【河上学芸員】 子供向けの、特に未就学児であったり、低学年のお子さんのワークショップというのは本当に人気があって、すぐに定員いっぱいになるというところで、それは必ず設定しようというふうに、これまでも展覧会のイベントを企画する上では考えていました。今回大人向けは、高齢者の方で参加したいという方もいらっしゃいました。笹川展ではなくて、亜細亜大学のワークショップに参加したいという方なんかも、手を動かすワークショップとか、ワークショップに興味があって行きたいんだけど、子供向けだとダメかしらというお声なんかもあったりして、なので、これからまたワークショップの対象の層を広げて、いろいろ企画の可能性あるんじゃないかというのは、この思い出を集めてのワークショップで感じたところではあるので、積極的に検討したいと思っています。

【坂井委員】 分かりました。

【原田委員】 関連してよろしいですか。今、高齢者の方がワークショップに来たと、そういう人たちというのは、絵を描いたこともあるとか何か作ったことがあるというような絵心のある方なんですか。

【河上学芸員】 そういう細かい作業がお好きだという方もいれば、やったことがないからやってみたいという方もいました。お絵描きワークショップをしたんですけれども、これは実は「どなたでも」という対象でした。結果はほとんど親子でいらしたんですけど、お一人、大人が1人で参加されて、純粋に絵を描くということをしてみたかったというところと、展覧会にとっても興味があったからというようにところで来てくださったたり。あと、作家さんとお話したかったという、そういう理由でいらした方もいたり、本当に様々だというのが今回分かって、可能性がたくさんあるな、あまり決めてかからないほうがいいなと感じました。

【原田委員】 子供たちが作家の方に直接手ほどきしてもらって一緒に描く、うちに持って帰れるってすごい体験だと思うんですね。それに14人も来るといいなと思いました。毎回、子供のワークショップって結構たくさん来ると思うんですが、顔ぶれは固定客がいるんですか、それとも毎回変わりますか。

【河上学芸員】 前に来た方もいますけど、あとは、鑑賞教室で来たことがあるという、本当にリピーターのお子さんとかがたまにいて、うれしいなと感じた。

【原田委員】 それを伺ったのは、せっかく貴重な体験なので、固定客にならないように、いろんな人が来てくれるといいなと思いました。それから、僕なんか、ワークショップ

プって書いてあると、何も知らないのに大丈夫だろうかと思うけど、今のお話だと、全く絵に関係なくても参加できるということであれば、何かちょっとそういうことを書いたほうがいいかなと。どなたでも参加できますとかね。そう書いてあったら、今度、僕も参加します。

【河上学芸員】 ぜひ。

【鉄矢会長】 そのほかございますでしょうか。

【加藤委員】 鑑賞教室について少しお伺いできれば。今年度がひとしきり終わったということなのかなと思う中で、喜びの声も多々聞こえているというところですけども、何か課題のようなものがなかったのかなというのを伺いしたいと思います。

1点引っかかっているというか懸念しているのは、子供たちの数が増えてきているのが本市の小学校の状況が今ありまして、三小、台風で中止ということなんですけれども、5クラス。私が15年前ぐらいに、ここに担任として来たときには、5クラスって考えられない規模だったと思うんです。そういったところで何か課題、それ以外のことで課題はなかったのかなということ。あと私、1点認識してないのは、子供のアンケートみたいなものは特には行ってないのかというのは。

【河上学芸員】 クラス数が全体的にかなり増えているなというのは、この数年でも感じているところで、そうすると、やっぱり学校によって鑑賞時間がまちまちなんですよね。5クラスのところは鑑賞時間30分のクラスとか学校さんもあって、3クラスしかないところはたっぷり1時間、1時間も実は短いなと感じているようなところもあるんですけど、本当に授業を目いっぱい使って鑑賞ができるという学校さんもあって、かなり不均等な印象は持っています。ただ、それは人数の兼ね合いなので、それに合ったやり方で鑑賞教室は行っているというところではあるんですけども、特に鑑賞時間が短い学校さんが可能な限り展覧会を見て、いろんなものを感じて楽しんでもいただけるかというのは、学芸員としてもいろいろ考えなきゃいけないと思っているんですけども、そういった中でワークシートというのがございまして、それは希望の学校さんから、例えば事前授業をするというような学校もあって、事前授業しない学校もあるんですけど、事前授業をするという学校の先生に向けて、展覧会に合わせたワークシートを、美術館の学芸員、担当が作成をしてお渡しをするんですね。それを事前にワークシートというのを、これからこういう展覧会を見ますというところで、例えば展示作品を白黒で印刷して、この絵はどんな色だと思いますか、想像して塗ってみましょうとか、とても簡単なものなんですけれども、そうい

った事前授業を1つ加えて、それで鑑賞教室に来ると、それが30分であれ1時間であれ、生徒さんはそこへの踏み込み部分が、展覧会に気持ちがずっと入っていくみたいな、そういう仕掛けになっているんじゃないかなと。

【西尾学芸員】 前原。

【河上学芸員】 そうですね。前原、30分、すごく短かったので心配していたんですけど、ワークシートがあってすごくよかったなと感じたところがあります。なので、鑑賞時間をどういうふうに埋めるかという工夫は美術館として一つ課題かなとは思っています。

【西尾学芸員】 アンケートということだったんですけれども、今話にあったように、鑑賞時間はとても限られています。60分の中でも鑑賞で時間がいっぱいというところが基本になっていまして、私と河上が入ったばかりのときには、ワークシートを書く時間が欲しいという学校さんもないわけではなかったんですけれども、その書く時間はちょっともったいないねということになって、やはり鑑賞時間で60分ないし30分が埋まってしまいうのが定型化しております。そうすると、アンケートというのはやはり必要かなというのは伺って思ったんですけれども、学校さんのほうで、図工の教員の先生のほうで児童の皆さんにアンケートを取っていただくというのが方法としては現実的かなと感じました。

【加藤委員】 1つは、この後出てくる提言のほうに何かしら関わるかなと。鑑賞教室を見た子が、またここに戻ってくるみたいなことって、この美術館の中で非常に重要なポイントじゃないのかなと私は思っていて、その充実というところは、この提言の中にどうしても必要な部分として位置づけることができればいいと思いますし、子供が増えている中で、こちら側の体制も整えないと充実は図れないというようなスタンスの提言もあるのかななんてちょっと思ったりもしたので、そういうお話をしたのと、もう一つは、やっぱりアンケートって重要かなと。今、いろいろなところで子供の声を聞くということがすごく言われる時代になっていて、特に今年はそういった風が強く吹いているような状況なんです。

一方でアンケートは、子供たちに端末がありますので、選択式のものであれば、選択項目があって、楽しかったですか、1、2、3、4みたいになって、ピチピチピチピチってやると、本当に一、二分で終わってしまう。従来の紙に書いてもらってやるとすごく時間がかかるものがあるという間にできますし、子供は慣れていきますし、サポーターみたいな方もいるので、そういうフォームを作るというのも、専門性のある方に手伝ってもら

う部分もありますし、そういうことを考えると、アンケートを取っていくこと自体も、この事業の価値づけにもつながるような気はしたので、そういうことも必要な要素としてあるかなと思いました。

【坂井委員】 関連してお尋ねしてよろしいですか。私、5クラスとか3クラス、そのまま見過ごしていたんですけれど、物理的にどんな感じで回しているんですか。1クラスが来て退室して、次のクラス。

【河上学芸員】 そうです。

【坂井委員】 そうすると引率の先生は、83クラスなら3人おいでになるということですか。

【河上学芸員】 図工の先生と担任の先生というお二人が1クラスというような形なんですけれども、人数が足りない場合は校長先生がいらしたりとか。

【加藤委員】 そうですね。校長先生が全体を見て。

【坂井委員】 ああ、御覧になって。

【加藤委員】 ありましたね。

【河上学芸員】 かなりアクロバティックに皆さんやってらして。

【西尾学芸員】 午前中は学芸員と図工の先生は休めない。

【河上学芸員】 休めない。1回担任の先生がインフルエンザで急遽来れなくなったという日があって、そのときは先生が1人しかいなくて、三十何名が来て……。

【中村学芸員】 学芸が1人とかだと、もうどうしよう。

【河上学芸員】 目が届かないという状況にもなってしまうこともあったんですが、それを極力避けるために、事前に学校さんのほうには、担任の先生と美術の先生というお二人、プラスでどなたか管理職の方をというところをお願いはしているんですが、なかなかそれが物理的に難しかったりするケースも。

【坂井委員】 結構物理的に難しそうだなとすごく思いました。

【河上学芸員】 なので、1日潰れちゃいます。

【坂井委員】 鑑賞が終わった生徒さんは帰ってしまうんですよね。待機しているわけじゃ……。

【河上学芸員】 帰ってしまいます。

【加藤委員】 大体バスで来るので、バスで待っておきなさいというのを。

【河上学芸員】 バスかここです。近い学校さんは徒歩で、南小とか前原とか一小は徒

歩で。

【坂井委員】 なるほど。分かりました。もう一つ関連で、小金井市って小学校の児童が増えてるんですか。そうなんですか。

【加藤委員】 少子化って言われていますが、一定の時期を過ぎると、また減少していくという方向のようではけれども、今は逆に小金井は増えていて、教室数も足りなくなるんじゃないかぐらいの増加をしている状態です。

【鉄矢会長】 三、四年前の保育園が足りない状況の、それがどうやら。今、保育園は足りてきちゃっている。

【坂井委員】 足りてきていますよね。過剰感がむしろあると思います。

【原田委員】 駅前のタワーマンションは意外に若い夫婦が多いというので、これからまだ増えるという話を聞いたことがありますけど。

【加藤委員】 そうですね。

【坂井委員】 人口も増えているんですもんね。

【加藤委員】 そうですね。人口も増えていますし、東小金井の駅前とか、かなり。

【坂井委員】 そうですよ。

【加藤委員】 今一番大きいのは第三小学校、台風で中止になったところが大きいです。5クラス規模になっていますので。ちょっと以前とは規模感が違ってきます。

【坂井委員】 そうなんですね。分かりました。

【鉄矢会長】 3年生は5クラス。

【加藤委員】 3年生だけが5クラスなわけじゃないので。全学年そうですから。そうになると、全体で言うと30クラスに近い。

【鉄矢会長】 中学校もまた足りなくなっちゃいますね。

【加藤委員】 だから、中学校はその後。ただ、中学校は受験する方もいらっしゃるの、まるっと全部が上がるわけではないですので、そこはちょっと違いはあります。

【坂井委員】 分かりました。

【鉄矢会長】 よろしいですか。では、次の運営協議会の提言について事務局からお願いいたします。

【事務局】 資料をご確認ください。前回の協議会の中で出た意見をなるべく反映しながら、たたき台を作成したところです。皆様から再度、御意見をいただけたらなと思っております。今すぐに御意見をというの難しいと思うのですが、今後の進行については会長に

お任せいたします。

【鉄矢会長】 じゃ、まずよく読み込みましょう。

【坂井委員】 このトップシートのまとめ、これ、あるのすごくいいと思うんですね。読み込みの前に先にこれがあるというのはすごくいいと思うんです。提言の1、2、3は、下のほうの文章の1、2、3とはリンクしてないんですが、リンクした方がよいですね。

【山村委員】 これ、提言1が下の1と2なんですね。だから、下の3が提言2で下の4が提言3に対応しているんです。

【坂井委員】 そうなんですね。そこがアンマッチなんですね。この「4年間の評価」の(2)のところに、先ほど加藤委員のおっしゃった、教育イベントに来た生徒さんがその後ワークショップに来ているというリンクがうまく実現しているというあれがあるといいですね。単発でそれぞれが終わっていないという形が見えるといいかなと思いました。

トップシートでおっしゃっている2つの文化財というのは、はけの森美術館と緑地のこと……。私には、2つの文化財で何だったっけという感じがしたんです。

【事務局】 そうですね。説明を入れたほうが。登録有形文化財のことを指しています。

【坂井委員】 そういうことですよね。

【鉄矢会長】 では、いろいろございますと思いますけれども。「施設の老朽化」って書いてあるんですけども。施設の老朽化って多分、市のどの施設も老朽化しているんだと思うんですけど、そこで目立たないといけないと思うんですけども、やっぱり学芸員の調査環境とか作品の収集環境とか教育普及をするための環境はどうだとかそういった話で、美術館の大事な業務ができなくなる環境になっているのが不安定であるみたいなことは一つある。「運営体制が脆弱」なんですけど、実際、研究室はあるんでしたっけ。学芸員が自分たちで研究している資料をちゃんと置いて学ぶ場所がないというのは言い続けてもいいのかもしれないし。

【中村学芸員】 基本的には、ここの多目的講義室が作られた2012年度のあたりの改修のときに、突き当たりの部屋を学芸員室として使おうということで、当初はそういった形でデスクを運び込んだりはしたんです。ただ、その後結局、寄贈作品の預かりですとか、いろんな資料を運び込んで仮置きする場所がないという問題に対応するために、どんどん突き当たりの部屋にそういうものを置いていった結果、そこでデスクを使ったりするのは事実上全くできなくなってしまって、恐らく河上と西尾が来てから、あそこで学芸員としての仕事をするというスペースとして多分認識してはいないかと思うんですけ

れども。やっぱり今も仮置きしたものがあふれ返っている状態で、学芸員室というのは名前としてただ残っているのが現状です。

【学芸顧問】 残っているの？

【中村学芸員】 一応、「学芸員室」と言ったら、あそこの突き当たりということにはなっているんですけども。ただ名前だけです。

【学芸顧問】 実際に分けながら少し資料を持ってこようかなと思ったんですけども、1回見て、無理だというのが分かりました。というのが、1つにはスペースの問題もあるんですけども、あと、あそこの環境があまりにも悪いのね。暑いからって、空調がちゃんと効いてないから窓を開けると、前は木があるから視覚的には美しいけども、虫、蜂がいるということで、これは閉めなきゃいけない。それと、Wi-Fiもあそこにはつながってないということで、あそこにいるというのはほんの……。

【鉄矢会長】 そういう意味で研究環境が整わなきゃいけないという話は。

【学芸顧問】 当然そうなんですけど。公開資料とかが入ってくるとしても、それをきちんと整理しておく状況にはないんですよ。1回整理するのをやめると、ちょっと整理しても、次にまたぼーんとまとまって来ちゃうともう駄目だというのは、皆さん、経験則からお分かりでしょうけれども。ですから、その受付のところと一緒にやるので、勢い、いわゆるルーチンワーク的なものと含めて、プラスアルファで今度、研究だ論文を書くとなると、自分の本当に持ち時間の中で、こことは離れたところ、それを世間では残業と言うんでしょうけれども、僕ら学芸員というのは24時間体制からなっちゃうかもしれないし、あと国会図書館等で当然、必要な資料をあさってくる。そういう中で物事を考えていくという時間、何とかそこで確保することになってしまうんじゃないか。物理的な環境がよくない部分もあるんですよ。時間がないだけじゃなくて。

あと、作品の保存のことに言えば、もともとコレクションがあって、幸いなことに、中村研一の関係のものでどんどん寄贈の申入れがあって来ている。それをどんどん収めるといっても、それは活動すればするほど、美術館、博物館はコレクションが増えるから、どこでもそうですけども、収蔵庫がいっぱいになるけれども、この場合は、最初からの設定が中村研一のもをということがあったから、今もう、やっぱりちょっとない状態。なおかつ、御存じだと思いますけれども、空調等が芳しくないのがしばらく続いていて、これはここに書く前にクリアしておかなきゃいけない問題もあるので、一応そこら辺でこのことは止めておきますけれども。

ですから、スペース的な問題、そこで施設がどう使えるかということと、あと、少なくとも学芸員がこれだけの事業をしている中で、研究に使える時間がどれだけあるかということ、両方ともが少ない状態です。よそと比べては申し訳ないんですけども、企画部門みたいなものはほとんど持たなくて、企画会社から来て、そういうのをギャラで買って展示をします。展示のところでギャラリートークは学芸員がやるという、それを中心にしている美術館もあるわけですけど、この場合はある意味では、きちんと学芸員というのは何をするんだ、美術館とはどういうものかという基本のところが出来たからここまで続けてきたと思うんです。

でも、逆に僕みたいに途中から入った人間にしてみると、それがあつたために、それをやろうとするけれども、後でどんどん、どんどん本当は、それこそ栄養分、補充していかなくさいけないもの、それができてない。その矛盾は、5年でおしまいという1つもありますし、それは小金井市だけじゃなくて、今、本当にそういう制度が多くなつてきている。でも、普通は5年の人に対して常勤の人というのは、それがまた今度、雇用の差別というか、しんどいときもあるんですけども。その5年の中で彼らが課せられたものが物すごく多いということですね。そこだけは、文章化までできるかどうか分からないんですけども、御理解いただければと思います。半分外の人間で半分中の人間としてちょっと申し上げておきます。

【鉄矢会長】 調査環境の中に調査予算と調査時間というのが。研究時間、研究予算とというのが必要なんでしょうね。研究時間が少ないから研究予算も少ないんじゃないかないんですもんね。

【山村委員】 研究するスペースの問題は、今のお話だと物理的に無理ということですか。

【鉄矢会長】 収蔵作品があるのと、そこにまたさらにいろんなものが、調査してくれというものが持ち込まれて、どんどん、どんどんスペースは今は無理だということ。

【中村学芸員】 経緯として、もともと建物のこちら半分は、中村富子さんが生前、私生活のためのスペースとして使つてらして、亡くなつてから改修をしてこの形に移つたということがありますので、突き当たりの部屋って結局、私生活の部屋としては一番奥まつたところにあつて、多分そういう意味で言うと、一番プライベートの生活空間という意味合いが強かつた場所だつたんです。改修が入つた段階で、既にもう富子さんの生活の痕跡がかなり強く残つていて、それをこの部屋なんかは、天井なんかも全部、多目的講義室と

いう形で作り変えたんですけれども、奥の突き当たりの部屋は結局、私生活の空間としての部分の壁の張り替えだとかということまで及ばなかったところがありまして、突き当たりの部屋は猫の出入りが、ドアの小さいところに切ってあったりして、まだ残った状態になっているんです。そういうことで言うと、生活をするにはいいんだけど、仕事をするという空間として考えられていたかという、そうでなかったところに無理やりいろんなものを押し込んで、さらにそこに仮置きしなきゃいけないものなんかを置いていった結果、どんどん、どんどん使うということに対応していない場所になっちゃったというところがあります。私立の中村研一記念美術館だった頃の資料とか、ここを改修して美術館を建てたときの図面だとかというのも全部あそこの部屋の中に入っているんで、私立の中村研一記念美術館の頃書類なんかというのは、そういう意味で言うと、保存しておくということで、ずっと取っておかなきゃいけない以上、手がつけられない状態で、本当に文字どおりのブラックボックスで、ロッカー1つ施錠した状態でずっとそのままあるんです。

【学芸顧問】 決して全部がらくたとは思わないんですけれども、見ていてもね。ただ、それが活用できないような状況にあると。

【鉄矢会長】 現状、3つあるといいなと勝手に、バランスとして思って。バランス悪くて、据わりが悪いんですよね。施設の老朽化。評価。

【原田委員】 「事業内容について」という本文のほうを読むと、評価している内容が書いてありますので、「現状」というところも老朽化と脆弱というだけじゃなくて、にもかかわらず、こんなに頑張っているというのは一つあって、3つにしたほうがいいのかと私も思います。

【坂井委員】 現状の中に、評価が高いというのも入れてしまっただけという。

【原田委員】 ねえ。そう思わない？ いいんじゃないかなと思います。

【坂井委員】 そういう意味で原田さんがおっしゃっている。それがいいかなと思います。

【原田委員】 ねえ。そのほうがいいんじゃないかなと思います。

【鉄矢会長】 「4年間の評価」と「現状」は一緒でもいいですね。

【坂井委員】 そうそう。

【山村委員】 それは僕は書いたほうがいいのかと思う。こんなに悪い条件の中で収蔵作品は増えているし、調査もそれなりにやっているし。

【学芸顧問】 新しい企画もちゃんと起こしているし。

【鉄矢会長】 新しい現代美術シリーズもできつつある。

【坂井委員】 それがいいと思います。

【山村委員】 これはもう奇跡的なことですね。それを褒めて。だけど、そのためには提言で、施設をちゃんとしてねとか、人員の年限は5年じゃなくて6年か7年ぐらいにならないとか、文化的価値を生かすための、文化財が花侵庵と旧中村邸と両方あるんだから、それをもっとアピールして、経済的効果もあるんですよみたいなことまで書きちゃったりとか。この3つは絶対やってくださいねという。

【原田委員】 そうか。評価と現状って項目が分かれているから、現状が。

【山村委員】 これ、1つでいいと思います。

【原田委員】 1つでいいですね、これ。

【坂井委員】 そう思います。

【山村委員】 今、よくなっていると思います。

【原田委員】 あと、最初におっしゃった提言に題名をつけるというところの話なんですけど、「文化的価値を守る」という表現が、下のほうを見ると、最後は「活かす」と書いてあって、印象としては、「守る」というとちょっと後ろ向きで、「活かす」というほうが攻撃的というか、前向きでいいなと思うんですね。だから、タイトルも活かすと。文化的価値があるのは分かっているんだから活かすと。活かすためには、本文にあるように守ることが必要だということなのかなと思いましたけどね。

【山村委員】 私は両方、文化的価値を守り、活かすためにという。

【原田委員】 ですね。

【鉄矢会長】 守り、活かすために。

【原田委員】 ああ、「守り、活かす」でもいいですね。

【山村委員】 とやって、最初の「守る」のほうも生かす。実際守るほうもすごい危機的状况で。空調の問題が大きいですね。それはしっかりやっておかないと。

【鉄矢会長】 そうなんです。だから、老朽化というよりも、もしかしたら空調のほう、ほかの老朽化で雨漏りがひどいとか、耐震基準に合っていないとかいう施設がまだ市内にあると思うんですけど、ないのかな。でも、それよりも空調はもう危機的状况にあって、いつ壊れてもおかしくない状況であるというのは、緊急提言というのがもしかしたらあるのかもしれない。提言の中でも緊急提言というのは出してもいいのかもしれないですね。

【坂井委員】 提言のタイトルの末尾なんですけど、「あり方について」というよりも、

私の意見ですが、「の美術館を目指して」という形はいかがでしょう。

【鉄矢会長】 「守り、活かす美術館を目指して」。

【山村委員】 これ、運営委員会のほうの意見、提言だから、あまり忖度して、「期待したい」とかね。これ、「期待したい」というのが多いんですけど、「要望します」でいいと思います。

【坂井委員】 なるほど。

【山村委員】 せめて「望みます」とか「御理解いただきたい」のほうがあう気がする。

【鉄矢会長】 今、総合計画でこの辺ってどういう表現になっているんですか、総合計画の美術館関係とか。

【山村委員】 あんまり細かく言ってないよね、総合計画では。

【事務局】 あまり細かくはないですが、施策18に、文化の振興について掲載があります。

【山村委員】 宮地楽器ホールを活かす。だから、提言にあるように、それを活かすためにはこうやらなきゃいけないという。5か年計画に載っているものをやるんだよということと言わないと。たしか「拠点」という言葉も入っていましたよね。文化の拠点の一つとしては、やっぱりこれをちゃんと、空調を直さないと文化の拠点にならないので。

【坂井委員】 「適切な人員配置」の文章の最後のほうなんですけど、運営体制でいいはずがない。ここで運営体制の見直しが急務という形になるよりは、1、増員を求める、2、それが無理ならば休館日を増やすという形で、何を要望しているのかを明確に書いてしまったほうがいいように思いました。

【鉄矢会長】 学芸員の雇用は5年のしほりがあるんですよね。大学の教員も同じような制度がありますね。

【中村学芸員】 教員はたしか5年更新を繰り返して非常勤職員としてやって、5年を超えると無期雇用を求めることができ、4年9か月とかで切られて放り出すというのが続出して、今、訴訟になっているんですよね。会計年度任用職員に関しては、これは公務員という扱いになるので、5年から先に無期雇用を要求できるというルールが適用されないということになっているんです、たしか。

【鉄矢会長】 契約期間、厚生労働省、契約期間5年を超えたら無期転換できますというやつですね。ということは、こういうルールもある中で準じてないこの学芸員のルールは、やっぱり今の社会とかけ離れるぞというのはあるかもしれない。だったら非常勤の

公務員という感じですよ。

【中村学芸員】 これは学芸員に限った問題ではなくて、今、図書館司書の人たちもすごく問題として顕在化しているんですね。ずっと非正規で司書をやっていて、長年やってきたのに切られちゃうとかというときに、何も保障されるものがないということで、図書館司書の人たちが割と活動を始めてPRしていますけれども。

【鉄矢会長】 今度の市長になってから初めての提言ですもんね。ホームページとかもつくれるようになったんでしたっけ。

【事務局】 ホームページは今回、ここ数年で出来上がっています。

【河合学芸顧問】 SNSはどうでしたっけ。

【事務局】 SNSは今ツイッターだけ。美術館独自ではなく、市のツイッターや公式LINEを使って広告しているという感じで。

【原田委員】 市のLINEに登録すると、しょっちゅう美術館の宣伝が出てきますよ。

【中村学芸員】 しょっちゅう出すように設定をしてもらっています。おかげさまで、市のLINEが届いた翌日とかは人がきます。

【鉄矢会長】 先ほど、教育普及についてあったんですけど、ぜひ継続して開催してほしいじゃなくて、小金井市のある学年で全員がここに来て体験しているという重要性は明記しておいたほうが。だから、これはもっとやるべきだということと、これに対して、今の人材ではちょっと足りないとか、もう少しそこには人を、そのときだけでもいいからつけろとか、いろんなことがあるんじゃないかと思います。

広告宣伝、定期的にやってくれていたんでしたっけ。

【中村学芸員】 この4年で見ると、1年置きぐらいにちょうど入っているかなと。

【鉄矢会長】 バリアフリー化って出ていましたっけ。

【中村学芸員】 ここを改修して美術館になったときに、まず、もともとエレベーターがついていたので、エレベーターに関してはバリアフリー化の一環として整備が行われて、そのまま継続してメンテナンスをするということで続けてきている状態です。あと、先ほどちらっと言いましたが、ここが中村富子夫人が亡くなって、建物が改修されるときに、バリアフリーというところも考慮して、ある程度改修することを考えていたようです。例えば、お隣のお手洗いなんかに関しては、手すりがついているとか、そういうところはバリアフリー化の一環として、2012年頃から3年ぐらいかけて順次やっていたところのようです。ただ、十全かというところではない。

特に緑地側に関しては、バリアフリーというところと言うと、ほぼそういったところで手を入れられなかった場所になっていまして、特に車椅子の方が緑地の中を散策したいとおっしゃると、現状では対応ができない。階段になっていて、スロープになっている場所はどこにもありませんし。それから、中村研一邸のほうも、登録有形文化財になってしまったというところもあって、中の構造を大きく変えることが、こちらの美術館と市の采配でできるわけでは必ずしもなくなってしまったので、基本的には緑地はバリアフリーという言葉からは程遠い状態で、そのままであるという感じだと思います。

【鉄矢会長】 お子さんを連れてきた方がトイレに入って、多目的トイレはあるんですけど、たっけ。

【事務局】 おむつ替えの台ははないです。

【鉄矢会長】 そういうの必要だって入れておいたほうがいいんじゃないですか。そういうのを気にしている美術館であると。

【事務局】 そうですね。

【中村学芸員】 おむつをつけた子は来たんですけど、多分歩ける状態だったので、中で立って着替えていた。スペースとしては広いので、立っておむつ替えができる子だったら取り替えるだけのスペースはあるんですけど、完全にまだ、はいはいであるとかという子が寝転がって替えられるおむつ替え台はないという。

【鉄矢会長】 赤ちゃん、泣き放題で美術館を鑑賞できる日が来るとか。何かもっと、全ての人に開かれる美術館を目指すというところもあるんじゃないかなと思って。

【中村学芸員】 下のトイレも、男子トイレと女子トイレの真ん中に多目的トイレが造ってあって、恐らく1990年にここが建ったよという段階において言えば、あれだけの大きいトイレを真ん中に確保したというのは、やっぱりそのことに対してそれだけ意識を向けていた、時代で言えば総体的にそうだったんだろうと思うんですけども、そこから20年が経過して、だんだん世の中のほうが先に進んでいって、ここの設備が取り残されるという状態になってしまっているの。

【鉄矢会長】 では、お時間もあるのでこのへんで。また何かありましたら事務局までお願いします。4番目のその他です。事務局から何かありますでしょうか。

【事務局】 次回協議会は2月16日18時30分～になります。よろしくお願いします。

【鉄矢会長】 分かりました。18時30分。ほかにありますでしょうか。なければ、

以上ではけの森美術館運営協議会を終了します。インフルエンザがはやってきております。
明日は大学のセンター試験であります。皆様、気をつけてお帰りください。お疲れさまで
した。

— 了 —